

日本で初めてテレビ放送が行われたのは、1953年のことである。当時は、世間に受け入れられるのか、心配する声が多くを占めていた。しかし、街頭テレビや電器店などの放映により、予想を超える早さで普及した。また、1959年の皇太子ご成婚の中継は、大きな影響を与えることになった。東京オリンピックでは、テレビは家庭になくってはならないものとなった。

放送が始まったころのテレビは、非常に高価なものであり、当時の会社員の年収と同じぐらいであった。その後、一般家庭に普及すると、白黒テレビ・洗濯機・冷蔵庫の3つを「三種の神器」と呼ぶようになった。これらは、人々の生活の中で豊かさや憧れの象徴であった。さらに、家電メーカーによる大量生産によって、低価格を実現したことで売り上げを伸ばした。

1980年代には、放送の変革期を迎えた。技術の革新もめざましく、後半にはハイビジョン放送が開始された。中でもNHKが、衛星放送を始めたことで、視聴の幅を拡大する結果となった。これにより、離島や高層化の都市でも障害なく、電波を受信することが可能になった。その結果、非常災害時においては、車で移動できる放送局としても活用することができる。

2006年には、携帯端末向けの地上デジタル放送が29都府県で開始された。映像や音声をデジタル情報に変換し、地上の放送局に送信する放送方式である。これまでの放送に比べて、より高画質な映像を受信することができる。さらに、デジタル放送への移行で周波数に余裕ができ、携帯電話向けの新放送や防災無線などに割り当てることが可能になった。

現代の生活で最も身近なテレビのデジタル化で、多様なサービスが実現する。介護サービスの申し込みや各種の公共施設の予約が、テレビを通じて可能となる。また、電話回線やインターネット回線を接続することで、テレビ局と情報のやり取りが可能な双方向機能も魅力だ。今後、新しい技術の導入によって、暮らしに役立つ便利なサービスが増えることを期待したい。